

田遊読本献読(数え文)

日向七草祭での 中心的な演目



觀音七草祭讀本

万延二年丙午正月六日

同じ演目が繰り返されるなぞ



裏面の「行事の概要」で、演目1「歳徳神礼拝」から演目4の

「ごまんずばやし」までは、後半でも同じ演目が繰り返し演じられています。前半は練習、後半が本番だとされていますが、演者の皆さんは、この祭りのために多くの時間を費やして練習してきているのですから、今さら「練習」とはどうもすっきりしません。

祭りの内容や順序は、時代とともに変化してきました。演目を繰り返すのには、それなりの理由があったはずです。この理由には諸説あるようですが、その中のひとつをご紹介します。

浜行・若魚は、酔っている？

浜行・若魚は、酔っている?
交通機関が未発達な昔、日向地区から大浜用宗方面までを徒步で往復する「シオバナ汲み」は、大変だったに違いありません。さらには春は名のみで、一年でもっと寒い時節ですからさぞかしつらい道中だったでしょう。
ある年、浜行若魚の役を命じられた二人の男が、祭りの前日早朝に日向から大浜へ向かった。海水を汲み、真鰐の尾がしらを買い求め、その日は宿で一泊し、祭り当日の朝また暗いうちに宿を出て、昼夜になつて、清洲との分かれ道にあるハ幡(ハ幡)をたどり着いた。すると、どんどんよりして空から雪がちらつきはじめた。
「やあ、雪だわ。さびいなあ」「ほんでも、こがははあハ幡だんて、あとちつとだなあ。腹空いて、空いだくなつて、飯にすつがやあ」ということで、二人は葦科川の土手に座つて握り飯を食べはじめた。

「なあ、寒いんで一杯やつか?」「酒か? 庄屋酒は恐られいやあしねえか? んでも、雪見酒はいいのね」「どうせひょつといの面を被つちまつんて飲んじゃひかうですか?」
こうして二人は町で買い込んできた酒を飲み始めた。雪は次第に激しくなり寒さも増してきた。一杯が二杯、三杯となりとうとう二人で一升を空けてしまった。
「ああ、出かけるわあ」
ど二人は歩き出しだが、足元がおぼつかない。右へ左への千鳥足だ。坂上村(現坂の上)を通過する頃には陽はすつかり落ち、二人の足取りはざわに遅くなつた。
その頃、日向の福田寺では、祭りの関係者
が、浜行。若魚の帰りを今が今がと首を長
じて待っていた。祭りの開始時刻を過ぎて
も二人の姿は見えない。祭りの頭は業を考
るし、「皆の衆、これ以上皆を待てるわけには
がん。さあ、祭りを始めてくれ」となつた。
祭りは予定時刻を少し遅れて、演目一の「歳徳神礼舞」から開始された。演目四の「まんすはやし」が終わる頃、やつと浜行。若
魚の二人が、えつちらおつちらと福田寺に

皆の
祭りの
縁り、
の進む
演目の
魚のこ
の舞つ

衆、祭 頭が
返して

なかなか返しが演じてみつてのりはりに舞にいたいの

最初が「なかの」。現在は、「十鳥足」。

田寺　火地山　この斧　さきひのじになじみます。評判だつて、いろいろあります。

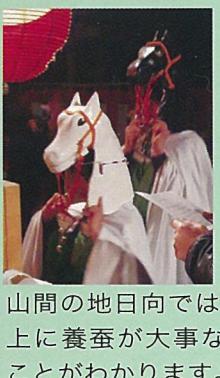
り直 最初 つた 続い たった なりに ので は。

飲酒運転撲滅にご協力ください!!

政治連携機関に協力したこと..

静岡県無形民俗文化財に指定されるに当たって、これらの古文書の存在は欠かせませんでした。

こまんず(駒んず)



田遊系の祭りは
全国に多数あり
ますが、養蚕(カ
イコの養殖)の
繁栄を願う演目
は、他では見る
事がほとんどあ
りません。

山間の地日向では、かつて稻作以上に養蚕が大事な生業であったことがわかります。

ご観覧される方へ

区の住民がこそつて閑わって熱り行われていると言つても過言ではありません。伝統を守り続けていくことは容易ではありませんが、これからも、親からの子へ、子から孫へと、代々引き継いで守つていきたいと思っております。

無
斗

三〇八

七草祭 行事の概要

旧暦

シオバナ汲み

※開始日時や行事・演目は
変わる場合があります。
※演目は「これ」とは別の呼
び方もあります。

大日待

午前10時 日の出の祈祷
午後1時 水垢離(舞役の禊)

午後6時半 夜祭りの開始

一、歳徳神礼拝
二、大拍子踊
三、猿田楽踊

おおひょうしおどり

(ソーソー節)

四、こまんづばやし
(蚕を飼う教え)

五、浜行 千手観音に
献し物奉納

はまゆきせんじゅかんのん

六、若魚 同上

わかいおどうじょう

七、一番より六番まで
舞の奉納

はまゆきけいだい
まい

八、浜行 境内の内淨め
施工後順番奉納

はまゆきけいだい
こうごじゅんばんほうのう

九、是より本祭となる
十、翁どの乃田遊読本の
出場のこと

これのたあそびとくほん
じゅつじょう

十一、歳徳神礼拝

おきなとくじんらいはい

十二、大拍子踊
(ソーソー節)

おおひょうしおどり

十三、こまんづばやし

十六、終了
(数え文)

さるでんがくおどり

十五、猿田楽踊

たあそびとくほんけんどく

十四、田遊読本献読

かぞもん

オリビラキ

1月8日 1月7日

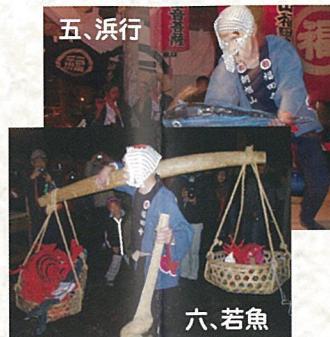
1月7日

1月7日 1月6日 1月5日

オリビラキ



十四、田遊読本献読



五、浜行



四、こまんづばやし



二、大拍子踊・猿田楽踊



水垢離

【祭りの前々日・前日】

【前々日】シオバナ汲み シオバナとは海水のことです。担当者が大浜・用宗方面へ出かけ、海水と浜の石を採取してきます。翌日、日向町内の各戸に海水と浜の石が配られます。シオバナは、浜行の演目で、清めとしても使われます。

【前日】大日待(おおひまち) 祭りの前夜、陽明寺の集会場に関係者が集まります。飲食をしながら、明日の祭りの演目の最終の練習をします。料理に肉は一切使用されません。

【旧暦1月7日】祭り当日

【日の出の祈祷】陽明時で大般若の読経が行われます。

【水垢離(みすがり)】夜祭りで舞やその他の役を勤める者が、小向(こむかい)の吊橋下の藁科川で水浴をし、身を清めます。

【一、歳徳神礼拝(としこくじんらいはい)】歳徳神(としこくじん)とは、その年の福德をつかさどるとされる神のこと。この神の居る方角は毎年変わり、その方角を恵方(えほう)といいます。舞役は恵方を向いて三度礼拝します。

【二、大拍子踊(おおひょうしおどり)】カミニシモを身に付けた舞役六人が、円陣を作つて踊ります。

【三、猿田楽踊(さるでんがくおどり)】大拍子と同じ踊りを繰り返しますが、大拍子よりテンポが速くなります。

【四、こまんづばやし】日向の七草祭での特徴的な演目です。数人が笹竹を持って輪をつくり、やすつている笹竹の中を馬の面をかぶった子どもが入り、出ていきます。馬と入れ替わりに山鳥役の子どもが入り、出ていきます。馬は「馬と蚕の伝説」から、山鳥はその尾羽を蚕の掃き立ての時に使用するなどから登場すると考えられます。養蚕の繁栄が祈られ演じられるのは、全国的に珍しいことです。

【五・六、浜行・若魚(はまゆき・わかいお)】俵を背負っているのが浜行、天秤棒をかついでいるのが若魚です。ともに山海の幸をご本尊に奉納します。

【七・八、舞の奉納・浜行境内的内掃め】舞が奉納されている中、再度浜行が舞台にのぼり、シオバナを撒き清めます。最後にもう一度舞役が踊り、本尊へ礼拝します。

◆これからが本祭りです◆

【十、翁どの乃田遊読本の出場のこと】しばし休憩の後、本尊前から翁面と詞章本(万延本)が舞台へ移されます。

【十一～十三】本祭りの前と同じ演目を繰り返します。(本祭りの前の演目は練習とされています)

【十四、田遊読本献読】舞台中央に田んぼに見立てた大太鼓が置かれ、周りに座ります。主な者が万延本の数え文(かぞえもん)を独特な節回しで読み上げます。稻作に関係した鳥追い、田植え、取り入れなどについて語られています。

【十五、猿田楽踊】十七】本祭り前の三の演目と同じ所作です。翁面と詞章本が本尊に戻され、一同が本尊に礼拝して夜祭りは終了します。

【祭りの翌日】

オリビラキ祭りの後片付けの終了後、参加者の慰労を兼ねて、祭りについて語り合う宴席が町内集会場に設けられます。